曲亭馬琴著

和漢撮合二編

每篇八局合本

歌川國安繪画

漢楚賽擬選軍談

貳

へ13
3056
2

馬琴著

逡巡誘敵妹尾兼安緩兵計畧
滯陣彌日藤原宗義禍媒遊樂

漢楚賽第二編之一

歌川国安画
西村與八版

附
將憍則亡兼遠宗義一期盛衰記
九戰九勝木曾義仲蓋世驍勇傳
并
以鹿為馬木工頭秦長高傲慢録
出汝返汝阿波民部成良因果經

特
へ13
3056
2

漢楚賽擬選軍談第二編序

毎篇八弓合本四冊
上下二帙毎帙二冊

和漢将相の行状得失相似たるもの往々これあり木曽義仲ハ楚の項羽に似たり。さバれ義仲ハ勇悍膂力項羽に及ばず忠信器量ハ項羽に優れり。何となれバ義仲粟津の敗軍ハ疲労て奮勇の氣力なし被たる薄鉄乃鎧ども日属ゆれバ重しとなり項羽が垓下の敗軍に漢の十将軍我殺麾けく人なき境に入るが如し只その虞氏と相訣るを愛惜悲歌の趣ハ義仲京師を退くとき松殿の下の姫うへと別を惜むに相似たり是より先に義仲の北陸七个国を畧せしとき頼朝その功を忌く既に確執に及んとしけるを義仲これと争ハず且兄くく平家の大敵いまだ亡びざるをもて今仇寃を討ずして親族と戦んハわが志にあらずとて其の子清水冠者を質として加旃初諸源の起りしハ高倉宮の令旨によれバ義仲これをおもひて其の御子信濃宮を主として皇位に即かせんと欲せしに上皇許したまハず義仲ハこれを憤恨みて遂に不臣の罪を犯したり又項羽ハ吝くて功臣に与へざる約に背きて劉邦を蜀漢に籓に就しめ義帝を立て主としながら終にこれを弑したり。是ハ曲て頼ると云べし義仲ハ勇悍膂力楚の項羽に及びかて項羽ハ忠信義仲に劣れり又漢の高祖に頼朝ハ武略洪運粗漢高祖に似たれども寛仁大度ハ頼朝漢高祖に及ばず漢高ハよく東渉が庿を立て秦を亡せしの豪矢なる其の功を賞したり介するに頼朝ハ頼政の子孫に恩敷からず頼政ハ是頼朝と同宗にして漢高と陳渉の類にあらず其の始忘あまり有て賞罰正しからざる事を知るべし且漢高祖ハ劉氏にあらざれバ王とせず其の兄の子を初として親族を賞る大国に封じたり頼朝ハ則然らず叔父を滅し弟を殺せし罰信重くして賞鮮し譬ハ彼章魚の足を喰て腹に充るを快しとおもふが如し足竭ると云ハ身も亦斃れ何か悲しむ多識論の如くなれどもあらゆ漢楚の趣に做て勘定を合はるのミを好とせる永寿堂が又この二編を録んとて請求る事急なるまゝ聊これらの言を叙で虚実の異を明さまくと爾云。

文政十二己丑春正月吉日刊行

曲亭馬琴識

擬漢大將軍韓信
源九郎判官
義經
擬楚人蒯徹
常陸坊海尊

骨
折し
甲斐
擬楚大將桓楚
楯六郎親忠
扇
丁那
擬楚軍師范增
大夫坊覺明

擬楚大将
季布
勇婦
鞆繪
夜の柳
擬漢大将
夏侯嬰
和田小太郎義盛
御教書

案山子
功成名
遂く退く
擬漢留侯張良
前奈宮次官
親良
擬楚武信君
項梁
權頭中原兼遠

擬楚項伯
長瀬
判官代
義定

師走この那
庖丁研乃
二人まるぐ

擬楚項荘
越後中太能景

這段出於
第三編

會樊噲
武藏坊
辨慶

除ちに
まごあけぬ
戸を
御慶かね

這段出於第三編

軍師ぞと
主君
城中
近郡

仲
朝
宮
秀

よし仲
宗義

越
宗
仲

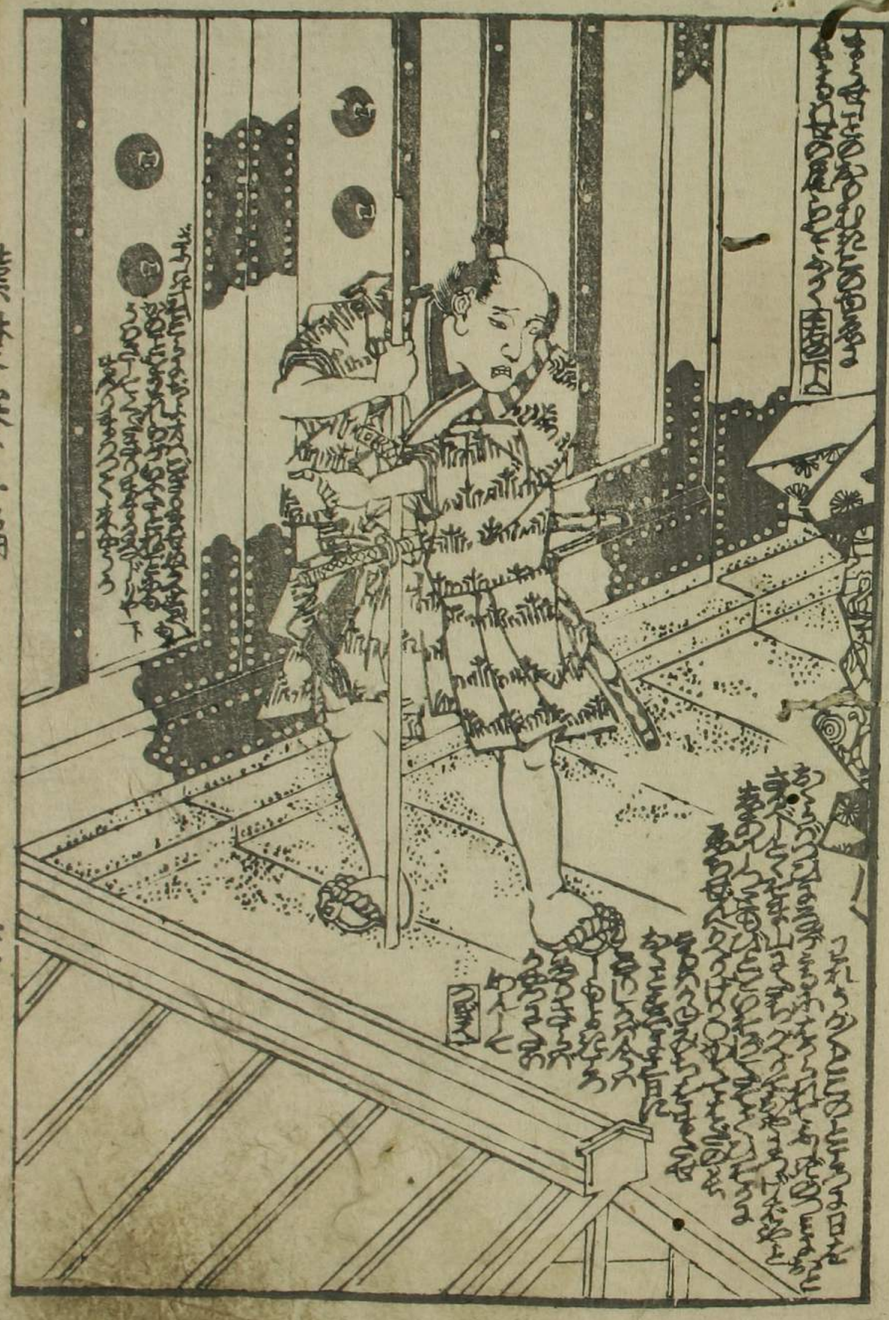
仲
宗
女房

仲

家傳神女湯 一包代百銅
精製奇應丸 大包代五十 小包代五十
熊胆黒丸子 一包代五十
婦人の蟲の妙薬 一包六十匹銅半包三十銅
製茶本家 神田明神下 瀧澤氏
仏所元飯町中坂下南側四方の向半沢氏
取次所 あ丑よこ山丁二丁目 大さかや安兵

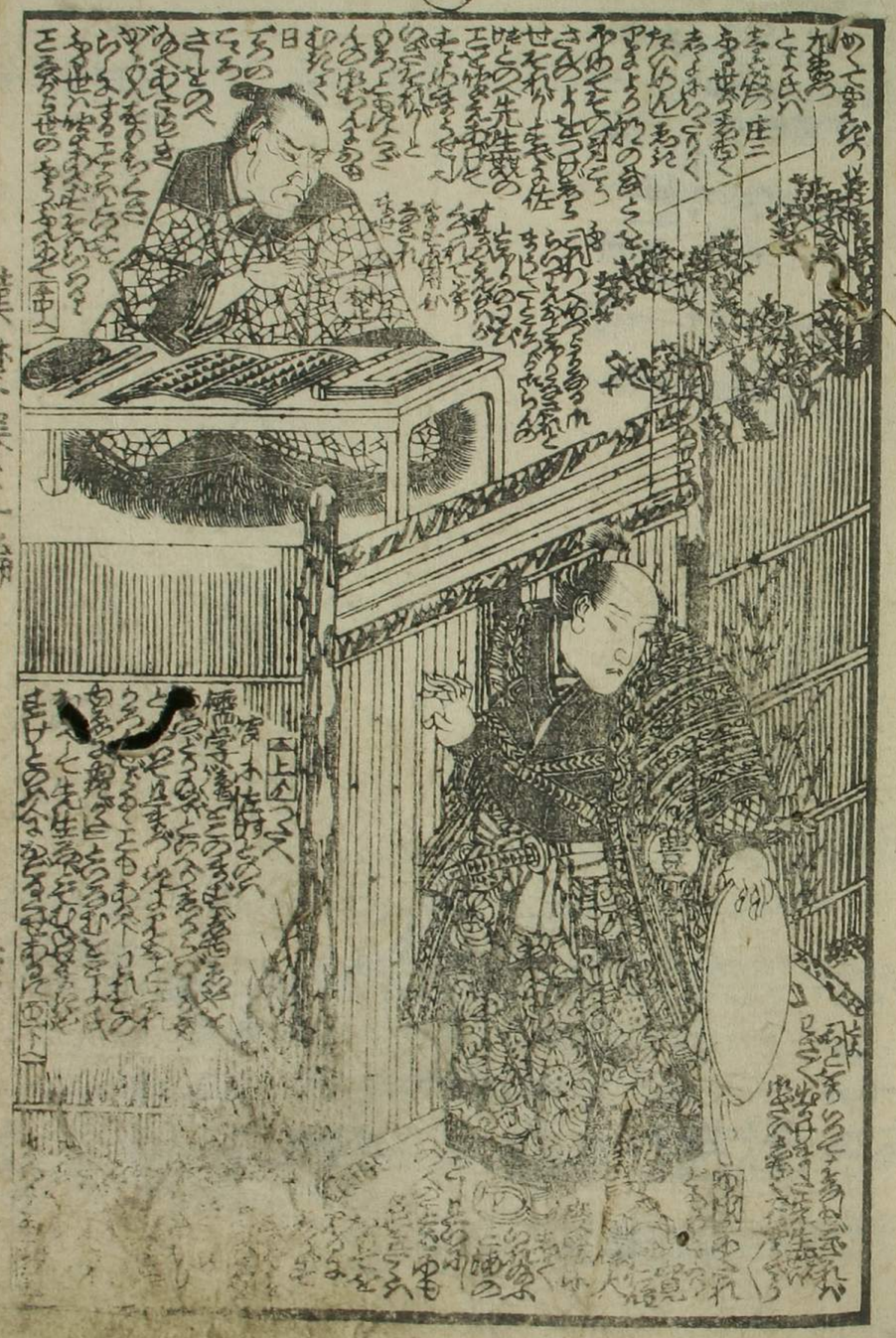
國安画

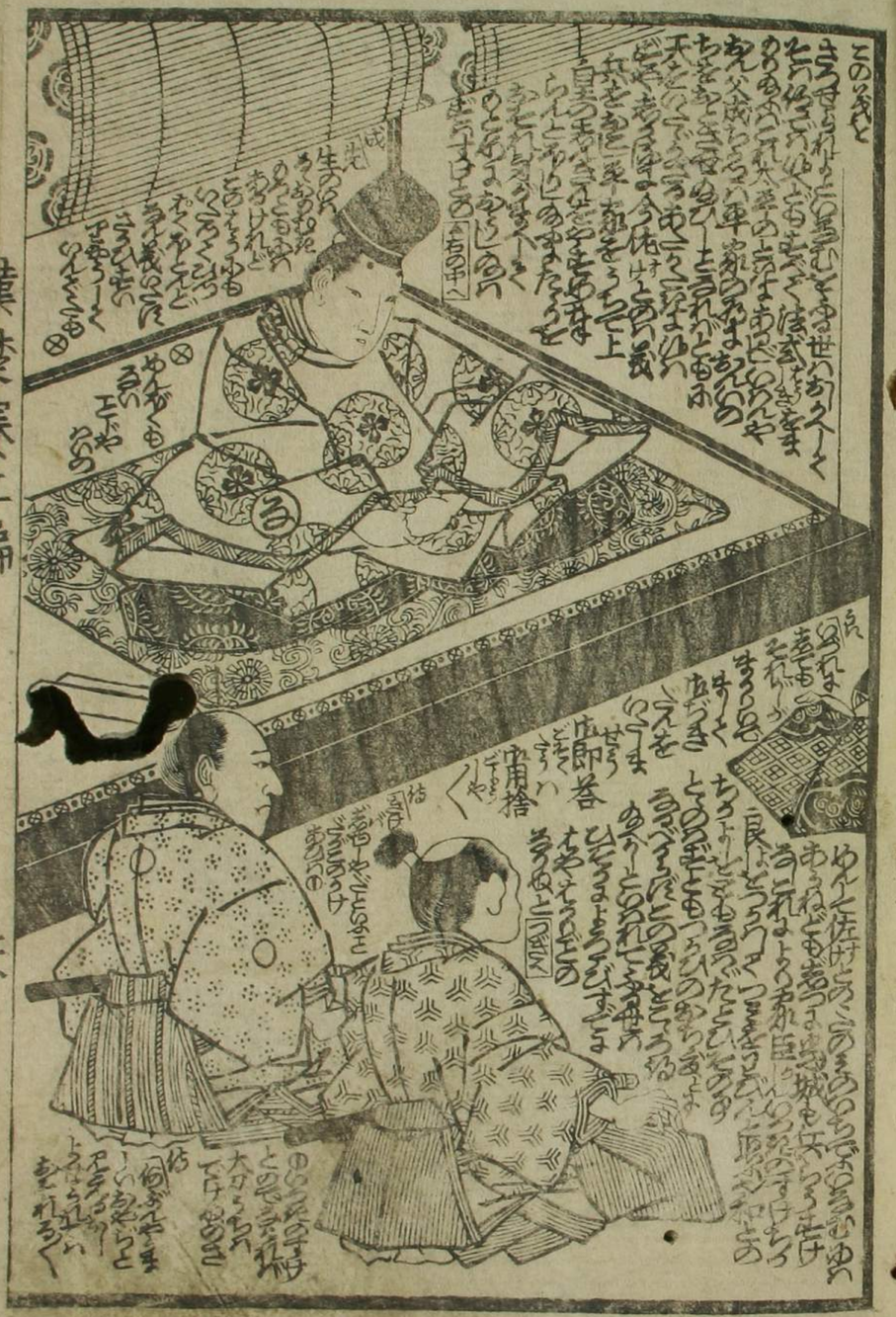
馬琴作



よし仲
ひらち
ねの井
左の上か

正
右の下へ





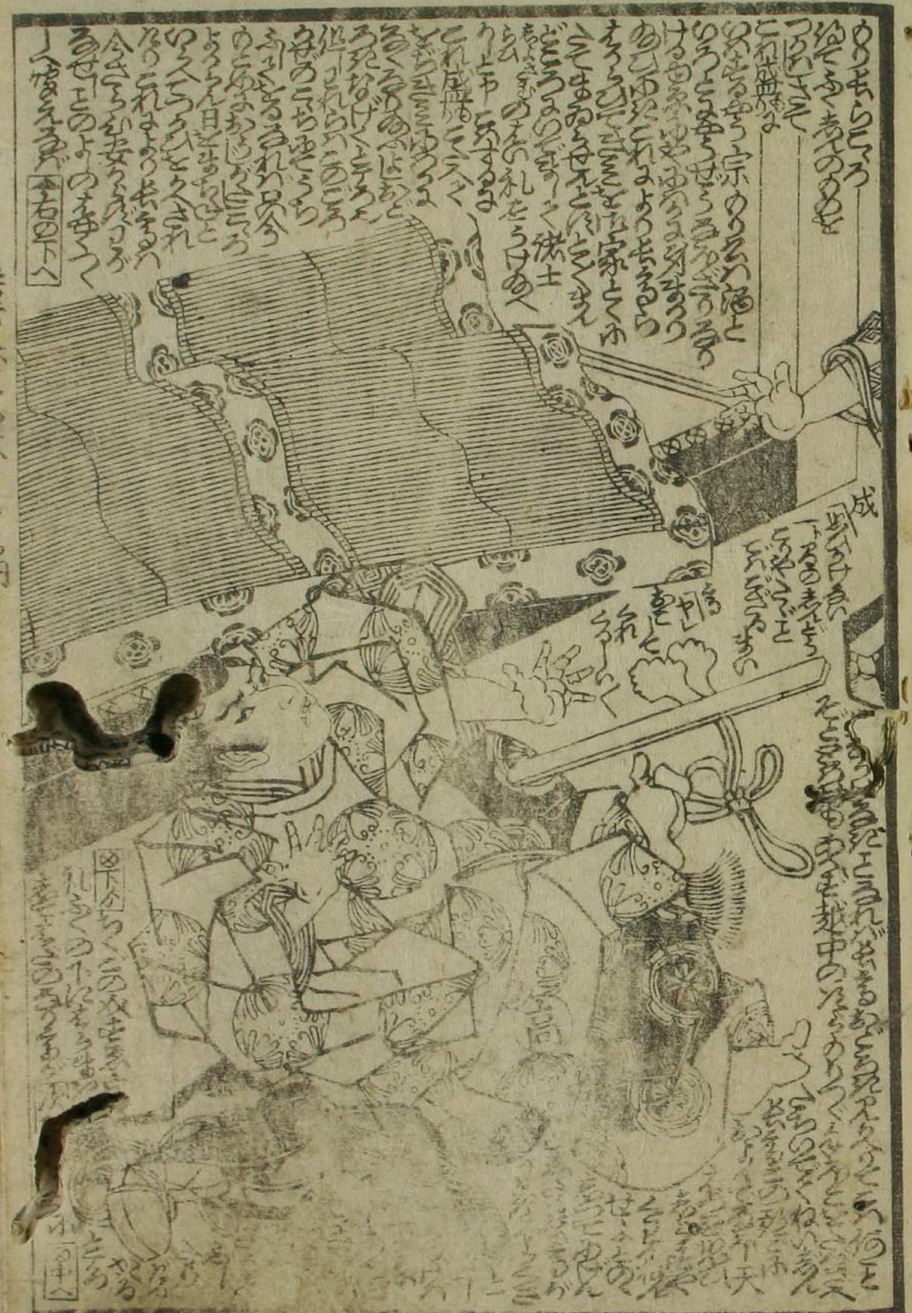
朝
廣

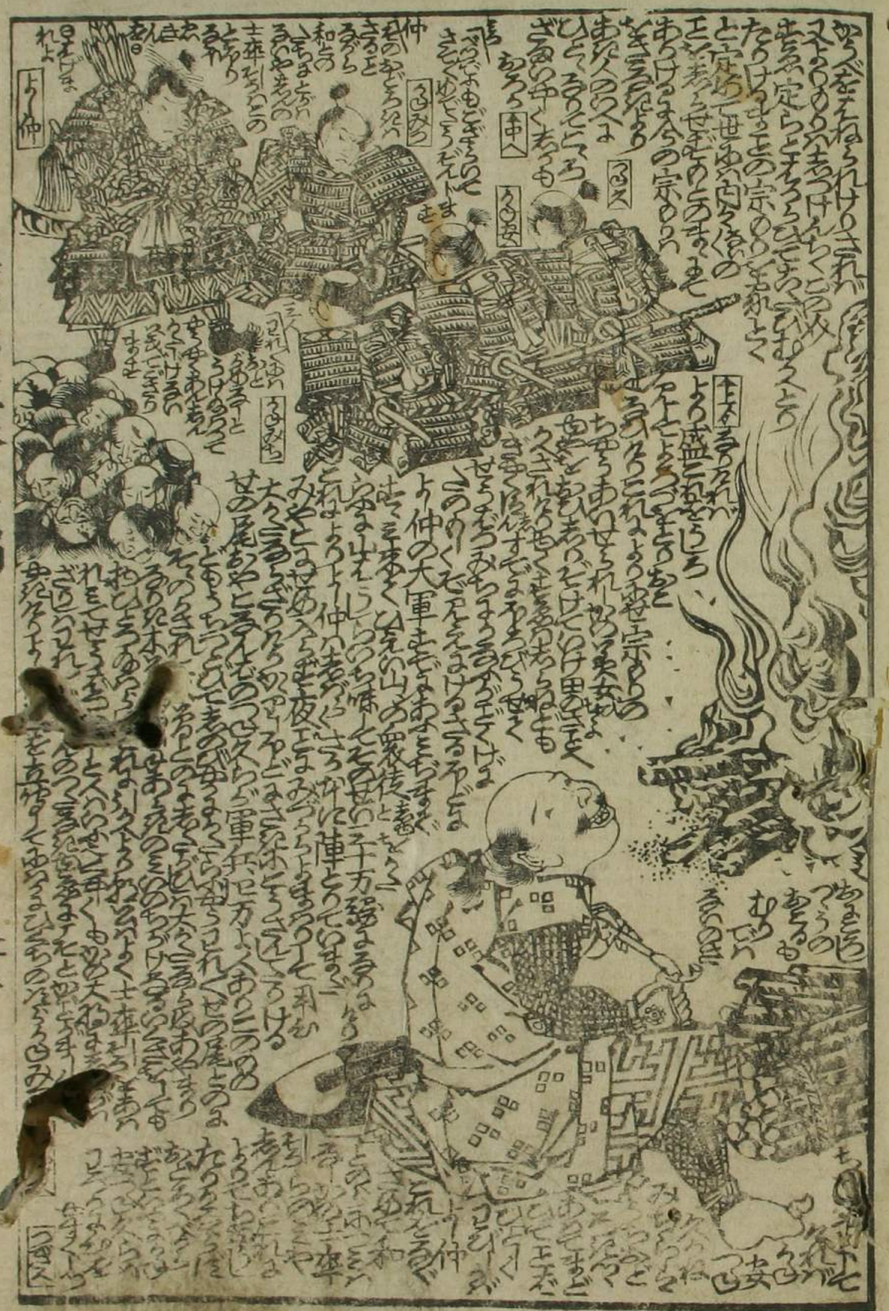
良

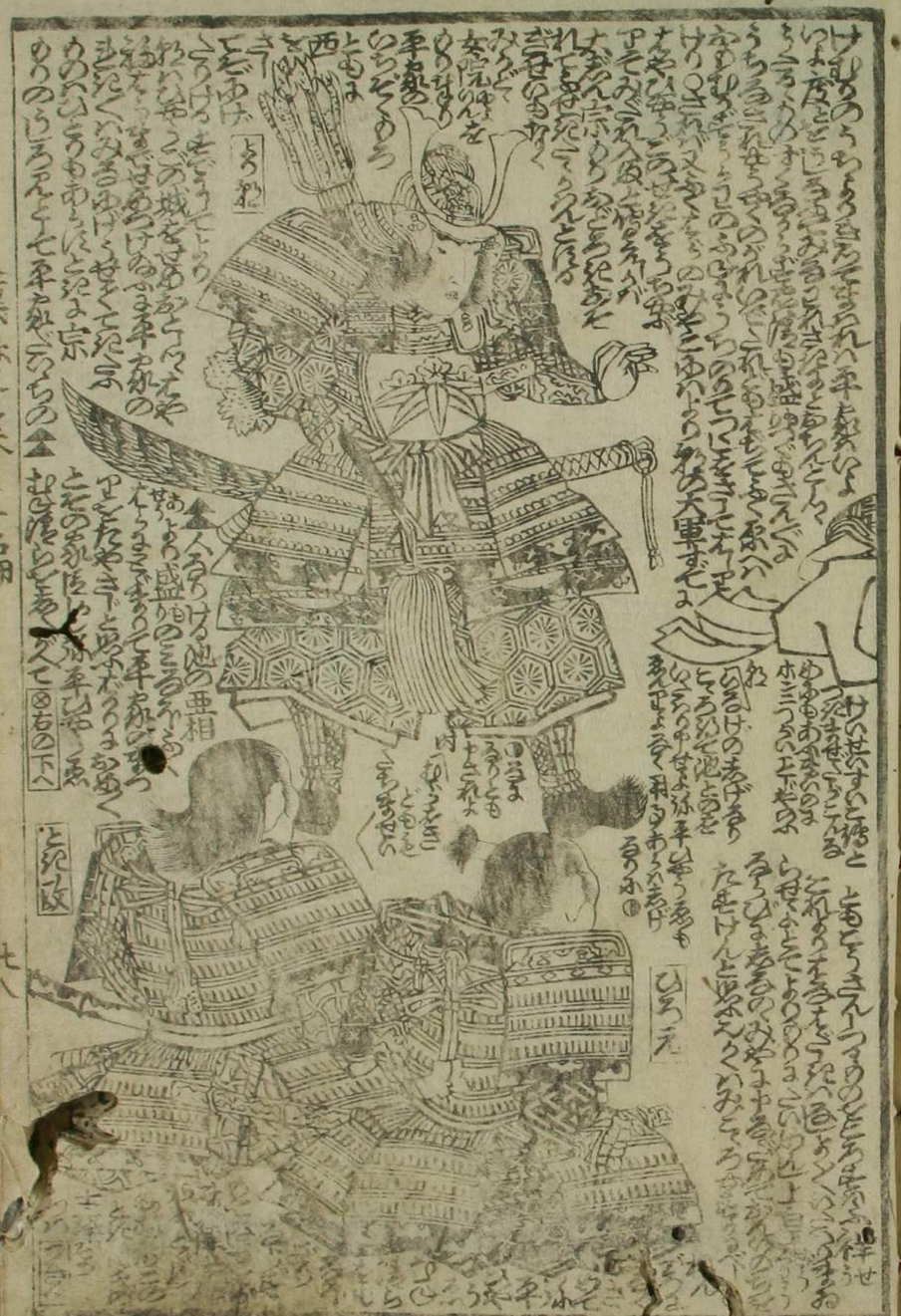
ひろえ

宗

成







つづき
中の左の
下の
覚
定

馬琴著

漢楚寶箋

本編之巻

国安画

鄺食其陸賈隨何に擬ふ
壹岐荘二歴世平判官康頼が
良主を得る学術は
なれきまうあまけるに東軍陣法

章邯董翳司馬欣に擬ふ
妹尾兼安兼通難波經久が
讒者を避し降参は
ちろまのびのまけ北将捷軍

己丑孟陽西村永壽堂刊行

抑這個秦の趙高閻樂に擬へ長高守長が我逆
頼む樹下に雨ぞ漏る張替傘の両箇の宗盛
一叔二甥三世子嬰は是六十のちよろく童
心恥し死姿見の池殿と呼ぶ　平頼盛之降月

曲亭新著　漢楚賽第二編之四　歌川國安繪画　西村屋與八版

扨尓後楚の范増項伯に擬へ覚明義定が天文
登る露臺と狐玉の黒髪あらぬ兵庫の関門
一體二心の韓栄朱蒯も五百金のむ門あり餌
迷されたる逃水の武野あらぬ　上總忠清走舟